



2011 年 10 月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 36

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 28

(聞き手 高橋素子)

高橋 > 今年は、我々人間を試すかの様に、地震・津波・ゲリラ豪雨が頻発。異常気象による天災の恐ろしさには、本当に驚かされています。被災された皆様の悲しみ、苦しみを思う時、涙を禁じ得ません。

それでも、季節は早くも「つくつくぼうし」を登場させて、秋の訪れを演出し始めていますね。

会長 > 人類は、自然をコントロールできると過信していましたね。しかし、それは大きな間違いだったことを教えられました。俳句は基本的に自然を賛美し、自然と一体となる思想が根底にありますから、自然をねじふせたりしません。俳句の思想を国土保全に生かすべきだと思いますね。

高橋 > ごもつともです。それでは元気を出して、百九年前の滑稽俳句集の世界にカム・バックさせて戴きます。本日は、「秋の植物」の部、季語は「栗」です。今日もご解説よろしくお願い致します。

毬栗の笑って曰く吾老いぬ 嘯山

いが栗をつかまんものとあせりける 露月

栗はねて大入道と化けて見よ 露月

栗はねて其身は飛んでしまひけり 紫影

会長 > 「毬栗の笑って…」の句、

これは毬栗頭に白髪が混じっている中年の自嘲の句ですね。

「いが栗をつかまん…」は、

いが栗は棘が刺さると痛い。しかし、おそらく、たくさんの栗を見つけて、焦って採ろうとしたのですね。

「栗はねて大入道と…」、

焼き栗をしているのです。大きな音をたてて爆ぜるから、そのパワーを表現しています。

「栗はねて其身は…」、

焼き栗の風景です。飛んでしまったら、探して見つければ良いと思いますが、昔は囲炉裏だけが赤々として周囲は闇だから、見つかりません。

高橋 > 本当に、童心に返ったような気がします。次の季語は「橙」と「芋」です。

橙を蜜柑と金柑の笑つて曰く 杉風

芋の葉や蓮か問へばかぶり振る 也有

会長 > 「橙を蜜柑と金柑の…」、

どれも明るい色で笑っているように見えたということですね。

「芋の葉や蓮かと…」、

面白い写生句です。よく似た葉ですが、いずれも大きい葉で、風に大袈裟に揺れる。それを「かぶり振る」としたのです。

高橋 > 「かぶり振る」などと、面白い芋の葉の滑稽句ですね。次の季語は「柿」です。親しみのある季語と見えて、沢山の句が並んでいますよ。

別かるるや柿喰ひながら坂の上 惟然

木のぼりの小僧は居らで熟柿哉 香水

柿の木にあそぶ子供や蟹と猿 白雪

柿の實や幾日ころげて麓まで 一茶

君が戀柿のへたとも思はれず 紅緑

ところで、御八つの豊富な現代では、柿の木に登った子どもは余り見かけませんが、柿の木と言えば子どもや御伽噺をすぐに想像したようですね。

会長 > 「別かるるや柿…」の句、

最近はさまざまな果物が出回っていますが、当時は人気の果物の一つだったようです。食べながらということは、皮ごと食べて皮を吐きだすということで、そういう食べ方は親しい間柄でないとできませんね。

「木のぼりの小僧は…」、

小僧は子どもという意味と、寺の小坊主という二つの場合がありますが、この場合は寺でしょう。熟柿になる前に採るはずの小僧が、その日は不在。熟柿がたわわに実っているのに、という意味でしょう。

4

「柿の木にあそぶ…」、

猿蟹合戦ですね。柿の木に遊んでいる子どもを猿と蟹に見立てていますね。

「柿の實や幾日…」、

柿の実は落ちやすいですね。いくつかは落ちて残ったものが、大きくなるという自然淘汰が行われるのでしょう。落ちた実は拾われることもなく転げてゆく。柿の木は平地に植えるというより勾配のある山畑などで見かけますね。「転げて麓まで」は誇張かもしれませんが、半端者の、柿に心を寄せる一茶が見える句です。

「君が戀柿のへた…」、

この場合の「君」は「女性」です。作者は女性と恋について語っています。「私は恋

なんて不得手です。殿方と話すことも口下手なので」などと言ったのでしょう。それに対して作者は「そんな風には見えないよ」とやり返したのです。

高橋 > 成る程、一見簡単に見える句も深い味わいがあるんですね。柿の句、続けて参りますね。

渋柿の烏も知って通りけり 一茶

ちぎりきなかたみに渋き柿二つ 大江丸

此柿は渋いか烏見てのみぞ 墨水

枝折れて盗人落ちし熟柿かな 波静

おのれ渋しと知らでや柿の真赤なる 紅緑

渋柿が熟すのを待っているのは、人間のみならず烏(カラス)も……。という事は、烏がつつけば、十分甘い熟柿ということですが、うっかりしていると、先に烏に全部食べられてしまいますね(笑)。

会長にも、ご自分のお心を正直に描写された滑稽句がおりますね。

泥棒の眼つきで見上げ熟し柿 健

会長 > 私のこの句は、熟柿が旨そうだ、食べたいと思ったことを句にしたわけですが、「旨そう」「食べたい」としたのでは、単なる説明になります。写生をするとういう句になるのですね。

「渋柿の烏も知って……」の句は、

烏はよく知っていますね。渋柿はつつきません。「烏も」というのは、人はもちろんということでしょう。

「ちぎりきなかたみ……」、

これは口語で言い換えるなら、「ちぎってきなさい。片身、つまり二人で分けるから渋柿を二つ」ということですね。渋柿ならばすぐに食べられてしまうこともないか

ら、しばらくは眺められる。これは男女の別離に際してのことが暗にあり、「形見」
という意味もありますね。

「此柿は渋いか烏・・・」、

この柿は渋いのだろう。烏が眺めているだけだと。

「枝折れて盗人・・・」、

柿の枝は折れ易いので柿泥棒が落ちることがあったようです。私の体験でも、柿
泥棒ではありませんが、落ちた体験があります。この句は、木の上の方は熟柿が
たくさん成っていて採れない状態なんです。採るには枝折れの危険を冒すことにな
る。

「おのれ渋しと知らで・・・」、

柿の実を擬人化していますね。自分では渋柿と気付かないということで、擬人化
した柿に人間を重ねるという高度な技ですね。また、自分自身が渋いということに
気付いていない人を揶揄してもいるのです。

高橋 > 大江丸の句が、男女の別離の際の句であったり、紅緑の句の渋柿が、擬人化した
人間の句であったり、意味深いご解釈勉強になります。

次の季語に参ります。「糸瓜」です。

身重感熟しきつたる糸瓜にも 健

という面白い写生句を会長もお詠みですね。

それでは、紅緑の滑稽句集に参ります。

名は糸瓜夕顔に似て哀れなり 長虹

目鼻書く糸瓜の顔の長さかな 子規

忍ぶ夜の糸瓜に天窓叩かれし 霽月

長けれど何の糸瓜と下りけり 漱石

隠居して糸瓜の如き人となる 毛子

角をためて牛を殺しぬ糸瓜曰く 蘭水

「角を矯めて牛を殺す」という諺がありますね。

会長 > 「名は糸瓜夕顔に…」、

糸瓜は役立たずの代名詞なんですね。活用するとしてもせいぜい「タワシ」ぐらいなものです。夕顔は干瓢など食用になりますから、同じような顔をしていても、糸瓜は役に立たないから哀れだと。

「目鼻書く糸瓜の顔の…」、

似顔絵を描いています。糸瓜のような奴だと思いつつ描いているのですから、糸瓜の輪郭を描いて目鼻をつけるのですが、最初に糸瓜を描いたから目鼻つけるのは大変。それにしても長い顔になったなあという句です。

「忍ぶ夜の糸瓜…」、

忍ぶ夜ですから、男性が女性のもとに忍んできたのですね。人に知られたくない時は物音にも敏感になる。誰かが窓を叩いた。見れば糸瓜だったということですね。

「長けれど何の糸瓜…」、

この句はとても優れています。糸瓜は、役立たずということを申しましたが、その糸瓜を慣用句を使って「長いだけだ」「ぶら下っているだけだ」と罵っているのです。

「隠居して糸瓜の…」、ここれも「糸瓜」をマイナスイメージで使っています。寡黙にして動き回ることもなく、消極的な生き方をすることになったということなんですね。まるで糸瓜だと。

「角をためて牛・・・」、

「ためて」は、「矯めて」と書きます。矯正するわけです。まがった角を真っ直ぐにする等して結局は牛を殺す。この場合は、真っ直ぐな糸瓜を育てようと曲がった糸瓜を無理やり矯正して、糸瓜に「牛だって角をためたら死ぬんだ」と抵抗されているという句で、とても面白いです。

高橋 > いつもながら、とても面白いご解説ですね。それにしても糸瓜の評判の悪い事！楽しく笑って学習させて戴いている内に、お時間となってしまいました。最後に今日の季語を使つての浪曲調の一句をお願いして、本日のインタビュー終わらせて戴きたいと思います。

会長 > ♪毬栗のおおおお 毬に人刺す心ありいいいいい
役に経たぬとそしられしいい
糸瓜も背中の垢を擦るううう
世の中は ああああ 瓢箪から駒の出るううう♪